

小清水赤十字病院だより

vol.84

Contents ◆伊藤院長より新年のご挨拶 ◆薬剤耐性について ◆年末年始休診について ◆令和4年3月～診療体制変更について



院長 伊藤 嘉行

新年明けましておめでとうございませう。皆さん2021年はどのような一年だったでしょうか。世間的には2020年に引き続き新型コロナウイルスに喜一憂した一年でしたが、2022年のお正月はどうなっているでしょうか。安心して一家団圓ができていればいいのですが。個人的には持病の椎間板ヘルニアが悪化して、内視鏡検査が長引くと右足の感覚がなくなるなど、身体的な衰えが隠せない一年でした。

病院としては内科担当常勤医一名が退職したことから業務運営が綱渡りの状況となっていた一年でした。山根先生、鶴岡先生、加古先生や応援医師の先生方に助けられてなんとか頑張ってきましたが、利用者の皆さんにはご迷惑をおかけしたかもしれないと詫言ひ申し上げます。

さて2022年はどうなっていくでしょうか。新型コロナウイルスを過去形にして笑い飛ばしているようならばいいのですが。あらゆる人にとって先行きに希望の持てる一年であることを祈ってやみません。

医療界としての2022年大きな話題は、2年ごとに行われる診療報酬が改定される年と云うことです。診療報酬は継続的に抑制されてきており、感染対策や医療安全などにかかるような収益を生まない経費が飛躍的に増加する状況の中で、全国の6割以上の病院が赤字に陥っているのが現状です。当院も例外ではなく年々収益が低下してきており、病院維持が難しくなる日がそう遠くないうちに来るのではないかと危惧しています。実は診療報酬にだけ責任を転嫁することはできず、地域の人口減少が診療報酬以上に大きな問題となっています。

ひとこと言つと病院を利用する人、特に入院患者さんの継続的な減少が病院体力を大きく奪う原因となっています。さらに検査機器の購入や更新は多額の費用が伴うこととなります。

毎年年末にかけて病院施設・機器の購入・更新計画を立てていますが、ここ数年は新規購入・更新ができておりません。

医療機器は6年ほどで更新するように作られている物が多いのですが、10年以上使

用しているものがほとんどで、次に故障したら部品が用意できないとメーカーに言われているような機器も多くなってきています。診療報酬の最大化のために病院の機能変更を行ってもそれを大きく上回る利用者の減少が病院の機能維持の足を引っ張っています。それでは昔の老人病院のようにどんどん入院させて病床をいっぱいにしたらどうかと言われそうですが、そこはそれで診療報酬の取り決めで大幅な減額のペナルティーを受けることになり、結果として収益アップにはならない仕組みになっています。そう甘くはありませんね。このような状況の中でどのようにして当院を維持していくかというパズルは極めて難問です。

その答えは検査機器など最小限とし、病床も削減して縮小化、究極的には診療所化が答えかもしれません。自治体病院の一部ではそのように対応してきているところも多くなってきています。今のように比較的气楽に入院をさせていただくことで安心してもらえるような使い方が賢いだったと思える日が来るのかもしれない。

当院の機能維持を必要と考えるか否かは地域がどれほど当院を必要と考えるかにかかっているかにかかっています。できることを行いつつ地域の皆さんの意思を尊重して改革・運営を行っていくことを考えており

薬剤耐性について

新年の挨拶としてはふさわしくないかもしれませんが、今年が今年の病院運営への抱負を語らせていただきます。

今後とも今までにましてご支援をいただけますようお願いさせていただきます、挨拶とさせていただきます。

1928年、イギリスのフレミングによってペニシリンが発見され、以降、私たちは細菌に対抗するための武器「抗菌剤」を手に入れることに成功し、感染症を恐れなくなりました。しかし、「抗菌剤」を使い続けていると細菌は変異を起こすことで抗菌剤に抵抗するようになりまし。

「薬剤耐性」とは、これまで効果があった薬が効かなくなったり、効が悪くなることをいいます。薬を使用すると、微生物は様々な手段で薬から逃げ延びようと、薬剤耐性を生じることがあります。薬剤耐性を獲得した細菌・ウイルスは薬剤耐性菌、薬剤耐性ウイ

ルスと云います。

国連は2019年4月29日「このまま何も対策をとらなければ、2050年までに薬剤耐性によって年間1000万人が死亡する恐れがある」と警告しています。

薬剤耐性菌を作り出さないためには抗生物質を使わないことが最も良いことですが、それは感染症の患者さんを治療することができません。そのため、抗生物質を適正に使うことが求められています。薬剤耐性の問題を解決するには、医療従事者だけでなく、一般の方を含めた「国民一人ひとりの協力」が必要不可欠です。「一般の方が明日から簡単にできる対策」もあります。

例えば、抗菌薬の必要な処方希望しない、自己判断で薬を減量・中止したりしない、家に残っていた抗菌薬をむやみに飲まない、抗菌薬をひとにあげない・もらわないことにより薬剤耐性を防ぐことにつながります。

また、感染症の予防も薬剤耐性を防ぐことにつながります。手洗いや消毒などの手指衛生、ワクチン接種も広い意味での抗菌薬適正使用の一環といえます。

皆さんと協力して一緒に感染症を防ぎましょう。

薬剤部長 糸川 貴之

年末年始の休診について

当院は、令和3年12月29日(水)～令和4年1月3日(月)まで休診いたします。

その他、1月の休診予定は以下の通りです。

- 令和4年1月4日(火) 内科 谷口 真澄医師
- 令和4年1月5日(水) 内科 亀井医師

令和4年3月～診療体制変更について

令和4年3月～
内科 亀井医師の診療時間が変更となります。

午前10時～診察開始

日頃より小清水赤十字病院だよりをお読みいただき、誠にありがとうございます。本年もみなさまの健康にお役立てできるような情報を発信してまいります。どうぞよろしくお願ひいたします。

小清水赤十字病院 広報委員会

